

文化の継承

その十二年の瀬行事 お年夜

まもなく年の瀬を迎え、どこのご家庭でも、この季節ならではの行事をなさるでしょうが、とくに鶴岡では、例えば十二月九日は、大黒様のお年夜で、家族一緒に豆料理を食べながら家族の幸福を願い、一夜を温かく過ごします。また十二月十七日には七日町観音堂のだるま市に出かけるなどです。このように、鶴岡には、その家々で受け継がれ、季節の行事として大切にしてきた数多くの年中行事が、一年を通して行なわれています。

そこで今回は、庄内民俗学会会員の五十嵐文蔵さん、梅木壽雄さん、七日町町内会会長の小杉誠さん、農家民宿オーナーの長南光さんにお集まりいただき、同学会会員の後藤義治さんの司会で、年の瀬行事 お年夜をテーマに、家庭や地域で行なわれる年中行事について語っていただきました。

人と共に 神様も年を越す



後藤 昔の人は生きるため、生活するためにいろんな行事をやっておられたわけで、人々は、代々それを地域や家ごとを受け継ぎ、いまでも大切な年中行事として行なわれています。そこで今回は、その中の一つ、年の瀬の行事をテーマにお話を伺います。まず、五十嵐さんから「年夜」についてお願いします。

五十嵐 年夜というと、例えば大黒様ですと九日、お観音様でしたら十七日。これはおそらく、それぞれの神様の一年のお祭りの最後、年末の特定の日のことという意味でしょう。なかなか年夜について、こういうものだと書いてある文献は残っていないんです。だから我々の生活の中で、年夜とはいかなるものかと考えるしかないと思います。

後藤 梅木さんはどうですか？

梅木 今、五十嵐さんがお話し



七日町観音堂のだるま市

やったとおりだと思えます。私なりに調べたことですが、昔から、神様や仏様には、それぞれ「縁日」というのがあります。一例を申し上げますと、毎月の五日は恵比寿様、八日は薬師様、

九日は今お話がありました大黒様、十二日は山の神様、十七日（十八日とする所もある）が観音様、それから二十四日が地藏様で、各月にお祭りをします。そのうち十二月は歳末、年越しなわけで、神様のお祭りも年を越すお祭り、つまり「お年夜」。そこで「馳走を上げて神様をもてなし」「今年も無事に暮すことができました」と神様に感謝するんです。

後藤 羽黒の松例祭も、大晦日の夜にやって一月一日の朝に解散します。一年のいろいろな汚れを払って、新しい気持ちで新年を迎える。そういう意味もあるのでしょうか。
梅木 してもう一つ。お年夜は「夜」とつきますよ。それはなぜかと言つと、本来、このお祭りは日の高い日中ではなく、夕方からお祭りを始めて、終わるのが朝。「夜籠り」という少し古い形式をとる行事があるんですが、氏子の人や一般の人たちが夜を通してお堂にこもって、神様を拝み、神様に仕える。そ

ういのは一つのなごりだと思えます。人と共に神様も年を越されるということです。

十二月九日 大黒様のお年夜



後藤 年夜の中でも、十二月九日は鶴岡の多くの家庭で大黒様の年夜をしているのではないのでしょうか。

五十嵐 これは、それぞれ地域

や家でお祭りの仕方は違うかと思いますが。我が家では、大黒様のお年夜には、黒豆の入った色のついた豆ごはん等、豆づくしのご馳走を食べます。お菓子も、「豆いり」（米いり）という、米を煎ったものに黒豆をまぜ、砂糖をまぶして食べるんです。だから大黒様のお年夜を昔の子供は楽しみにしました。

梅木 大黒様は、昔から福の神として恵比寿様と対に祀られ親しまれてきました。私なりに調べたところ、もともとは、大黒様の起源は、古代インドの大黒信仰で、今の姿とはまったく違う形相をした恐ろしい戦闘の神とされていたんです。それで時代が下って、寺の厨房の柱に、この神を守護神として祀ると、多くの僧が訪れようと食事にも困ることはないと言われるようになったという。形相もだんだん



梅木壽雄氏

庄内民俗学会会員
田川民話の会顧問



五十嵐文蔵氏

庄内民俗学会会員
市郷土資料館運営委員長



小杉誠氏

七日町町内会会長



後藤義治氏（司会）

庄内民俗学会会員
市郷土資料館運営委員



長南光氏

農家民宿オーナー、地元
ならではの料理に精通

とおだやかになっていったでしょう。それから唐の時代に中国に伝来し、日本には、天台宗の開祖、最澄によって初めてもたらされたと言われ、それから各寺院に広まっていった。とくにこの大黒様は、時代が下るとますます福の神の色合いが濃くなり、室町時代には、今のようないろいろに大きな布袋を背負い、右手に小槌ちちを持ち、米俵に座るといって大黒様が作られたと言われます。また当然、日本に伝来してからですが、神話に登場する大黒様は、大黒様が大黒様が大黒様で民間に広まり、庶民の信仰はさらに広まったといわれています。

まめで丈夫に働くように



後藤 長南さんの家でも、この日ならではの料理を作っておられると思いますが。

長南 地域や家ごとに少しずつ違いますが、我が家でもやっぱり黒豆を使った料理をします。豆ごはんや、なます、味噌汁、すべてに豆を使っています。それから、ハタハタの田楽。これは子孫繁栄を願って子持ちの魚を食べると聞いています。豆腐も少し固めにして焼いて田楽にして食べます。田楽も味噌だから、もともと大豆ですよ。

私なりに子供のころから食べてきた、体で覚えてきた味を復元して続けています。母から「この料理はこうして…」と言われたわけではないけれども、季節の行事食っていうのは、子供のころから日々の暮らしの中で伝えられてきたと思います。

五十嵐 大黒様の年夜と豆は深い関係があります。「まめで丈夫に働くように」なんてよく言われます。

梅木 私も昔、家のお年寄りから、大黒様は大変働くことが好きな神様だから、我々も大黒様にあやかっ、まめで働くために食べるんだと言われました。それで豆料理、豆づくしになったのでしよう。

また、大黒様のお年夜で欠かさないのは、二股大根（三股大根）をお供えすることです。「まつか大根」と言います。これには、昔話があります。大黒様はとも餅もちの好きな神様だったので、あまり餅を食べ過ぎました。お腹をこわして苦しんである村の中を歩いておたら、堰せきばたで若いお嫁さんが大根洗いをしておりました。大根を食べると腹痛が治るといふことで「これはありがたい」と大黒様その嫁さんに「大根一本分けてもらえないか」と頼みました。

すると嫁さんは「家の姑さんが敵しい方で、大根一本一本数えて洗ってらんだから分けられない、困ったなあ」と。するとその中に二股大根があった。これを一本として数えればいいから、嫁さんは二股大根の片方を折って、大黒様に差し上げたんです。大黒様は大変喜ばれて召し上がり、そして腹痛も治って喜んで帰ったということです。それからその嫁さんも大変幸せになったそう。こんな昔話があった二股大根を大黒様の年夜に供えるようになったと言われています。二股大根を「大黒様のお嫁様」と呼ぶ地域もあるんです。

小杉 我が家では、財布も供えます。

家族の幸福を願いながら



後藤 こういう家の年中行事は、先ほど長南さんが言われたように、親から子へと、伝え続けていくもので、日常の当たり前のことだからか記録したものがなかなかありませんが、図書館二階の郷土資料館にこんな資料がありましたので紹介します。



大黒様のお年夜のお供え
(田川地区)



お年夜料理（豆づくしの料理の中にはその家ならではの味や思いが込められている）

文化十年（一八三三）ころ、

鶴岡の百三十石の武士の家の年中行事についてその家の人が記録したものです。それによりまずと、やっぱり十二月九日は大黒様の年夜をしています。一部読んでみますと、『大黒天お年越し 家々これを祭る…』と。

『その品々いずれも知るところゆえ略す…』と。そう述べながら、『甚だしきは豆腐をもつて四十八色神前に上げる…』とある。『豆腐をもつて四十八色』というの、たくさん作ったという意味でしょう。その他に、この五十年くらい後の、四百石の武士の家の年中行事の記録があり、それにも豆腐や黒豆、米でお膳を三つ作り、大黒様のお年夜をしたとある。というわけで、このお年夜を、二百年くらい前にはすでにやっていたようです。それを今我々が引き継いでいるんです。

それから、これは昭和十年ころのある家の記録で、大黒様の年夜の夜にやった「硫黄つけ」について記録されていました。硫黄つけというのは、昔、マッチのないころ火種にするために作ったものです。缶詰の缶に硫黄を溶いて、それを麻の、繊維をとった後のオガラに付ける作業です。これを一年分大黒様の年

夜の夜に作ったそうです。何でそんなことをやったかということ、

まめで達者で働くようにと言われますが、大黒様に自分たち家族が一生懸命働く様子を見せたいという意味があります。働けば収入が上がる、収入が上がるということは、みんなが幸せに暮らせる、福が舞い込む、大黒様は福の神。そう考えて、その日に硫黄つけなど何か仕事をすると福が舞い込む、財産持ちになると考えたのでしょうか。

後藤 同じ大黒様の年夜でも、私の生まれた村山、内陸地方では唱えごとをします。そして、大黒様の年夜とはあまり言わず、『大黒様の耳あけ』と言います。私も子供のころしましたが、升に煎った豆を入れてふたをしてガラガラと音をさせて振るんです。そして「大黒様、大黒様、いい耳を聞かせてくれ」などと唱えます。どうして豆をいれて鳴らすか、これは大黒様は耳がよく聞こえないから神社を参拝する時にならず鈴のように、神様を呼ぶのでしょ。

梅木 『温海の民俗』という本を読みますと、それと多分同じようなことが温海の越沢に残っているようです。やはり豆を升に入れてガラガラと振って、『大黒様いいこと聞かせてくれ、

悪いことは聞かせねくれ』と大声で唱えると。庄内でも内陸と同じことをやっている地域もあるんです。

長南 内陸からお嫁に来て、その家の行事をしていくと、そこからまた少しずつ違っていくんでしょう。

五十嵐 やはり家庭行事っていうのは、その家々で伝えられているんだ。地域ごと皆同じとも言えないし。ただ、まめで暮すようにという願いはどの行事でも共通で、誰もがこの温かい思いを湧かされた。とても貴重なことで、こういう家庭行事は続けたいですね。

七日町観音堂のお年夜とだるま市



後藤 次にこちらも「お観音はんのお年夜」と呼ばれ親しまれてきた七日町の観音様のお年夜と、だるま市について梅木さんに伺いたいと思います。

梅木 七日町観音堂の由来から申しますと、江戸時代、あそこに柳福寺というお寺さんがあって、そこで観音様を祀っていました。ところが、この柳福寺が文化年間に火災にあつて焼失してしまつたと。その後やつと、江戸末期に近い嘉永三年（一八五〇）に寺を再建したんです。



郷土資料館所蔵の文久3年と昭和10年の年中行事の記録



座談会の様子

しかし明治二十一年、今度は七日町内の火事のもらい火でまた全焼してしまつたんです。その後、明治二十六年に仮のお堂を建てたけれど、寺そのものの復興は難しく、様々な経緯があつたようですが、現在は七日町町内会で南岳寺の住職の下、護持管理、祭祀を行つております。それから本尊様、私も一度拜ませてもらつたことがあります。六代ほどの木に刻んだ小さいお姿の観音様で、大日様の膝の上ひざに小さく立てかけられておつたんです。言い伝えによりますと、慶長十一年（一六〇六）、酒井家の前の領主、最上義光の時代のちようど午年に、七日町観音堂の裏の内川を普請した時、偶然川に観音様が沈んでおつたのを見つけて、それを上げてお祀りしたという由来を伺つております。それから十二年に一回、午年にご開帳しております。確か、八月ごろでしょうか。

小杉 そうです。

梅木 日本には、方々で神様が川や海から上がったという信仰がございます。例えば、鼠ヶ関の弁天様も、海から上がられて、そしてお祀りしたということが伝えられています。

後藤 だるま市の起こりはいつごろからなのでしょう。

小杉 詳細は分かりませんが、藩政時代、七日町には遊郭があつたと言われています。その遊女が苦難から逃れたいと、七転び八起きを願つてだるまを買ひ求めたことが起こりだといわれています。それが一般に広がって、今では縁起物としてだるまや熊手が売られています。

後藤 「切山椒」もだるま市の名物ですよ。

小杉 祭りの名物として昔から親しまれてきました。お菓子を作つた時の残りくずを粗末にしないように、練つて作るようになったと聞いています。

梅木 この切山椒は麵のように細長いでしょ。無病息災で長生きするようにという庶民の願いが込められているとも聞いたことがあります。

小杉 毎年、十二月十七日は天気が荒れることが多く、吹雪の中でも大勢の方が参拝に訪れます。最近では、小学校や幼稚園からも参拝に來ています。この日は町内会でも、だるま祭り協賛店の皆さんが「歳の市」会場を設け、餅つき大会やくじ引き等をし、「市」を盛り上げています。

古きを大切に 今も伝えていく



後藤 十二月の暮れになると、

遠くに住んでいる親せきに鶴岡の特産物を送るんです。七日町のだるま市で売られている切山椒も一緒に送ったり。それで鶴岡の年の瀬を感じて喜んでもらえる。こついった地域特有の行事は、これからも大切にしていきたいです。

梅木 今は核家族の家庭が増えています。例えば大黒様のお年夜の日は、若い人たちが実家のおじいさんやおばあさんのいるところに帰つて来て一緒にお祭りをしたらどうかと。そういう中で、お祭りのいわれや料理のお話を聞きながら子供たちに自然に身につけていく。

正月料理も、昔は家でみんな作つていたわけですが、近年は便利主義というか、正月料理もお供えもお店に行けば、もうセットで売っている時代です。確かに便利主義は楽になっていいけれど、考えるべきことがあるのではないかと思ひます。

長南 我が家も息子夫婦とは別に暮らしてますが、お盆や正月などの行事には一緒に過ごしています。あとは自由なだけだけでも。お盆のお墓参りも一緒、おはぎ食べるのも一緒、雑煮も一緒に。今、こつという行事をする家が少なくなつてきています。



七日町観音堂



郷土料理の下準備。食材や行事について話しながら手際よく進められる。

言われるけど、若い人たちは、いつ、どんな行事やらわしがあのか、やる気がないのでなく分らないのだと思うんです。やっぱりこれは、周りの大人が積極的に暮らしの中で伝えていくことだと思つ。古いことを本当に大事にして、新しいことも取り入れながら、若い人に暮らしの中で教えて、実践して伝えていきたいと思つ。

梅木 それが大事だと思つ。コミュニケーションをとらないと、**五十嵐** 家庭の行事は家庭でやらない限り伝わらないから。

長南 季節ごと、正月にはお雑煮を食べ、蔵開きには蔵に行つてお酒を飲んで、女の子の節句には甘酒だったり、男の子の節句には笹巻きを食べたり。お盆は、亡くなった人が来るんだよつて。早く来るように馬に乗つて、帰りは牛に乗つてゆつくり帰るんだよとお話したり。そんなことを次に伝えるのは、やっぱり我々年を重ねた人たちの義務なのかなと思つんです。
後藤 暮らしの中で、これだけは残していきたい、伝えたいというものはあるんだよ。

私なりの考えですが、学校給食の中で今日は大黒様のお年夜だから豆の料理ですよと郷土料理的なものを入れたり。

五十嵐 なるほどの。給食ですというのも一つの方法です。

長南 昔の料理や行事食というのは、手間暇がかかるんだけれども、これを子供たちに日常食べさせて、暮らしの中で、その行事の意味も一緒に伝えていかなければいけない味ですよ。

楽しい思い出は故郷を想つ心に



長南 我が子供ころは、地域のお祭りや家の行事のある日にお小遣いをもらつて買ひ物ができて、手にぎつしりの小銭をしっかりと握つて行つて、子供心にわくわくした特別な日だったの。そういう思い出が、大人になつて、故郷を想つ気持ちになつていく。だから、こういった行事はなくさないでこれからも続けていきたいと思つ。

五十嵐 昔は、盆と正月しか小遣いをもらえなかった子供が多かつたからうれしかつたよ。こういう年中行事つて、やっぱり子供心に深い印象を残しますよ。

小杉 そうですよ。だるま市の時に食べた切山椒の匂いや、どこかぴりつとした味は、その行事の時の味だと思つて、時間がたつて大人になつても心に残り

ますからの。

長南 貧しい家庭が多かつた昔と今は違つかもしれないけど、大黒様のお年夜に幸福を願う気持ちや風習は、心のもち様として大切にしたいですよ。

梅木 若い人も、無関心なのではなくて、分からないという人が多いのでしよう。

長南 子供たちは、昔も今もやっぱり変わらないんですよ。時代とともに環境が変わつていくから、子供も変わったように見えるのだけれども。

家ではお祭りには、孫に必ず浴衣を着せてやるんです。普段とは違つて、お祭りになると浴衣を着て下駄を履けると子供もうれしそつで。そつやつて季節ごとに楽しませながら、日々の暮らしの中で、子供たちの心にそれぞれの行事を伝えていきたいです。

後藤 大黒様のお年夜のような家でやる行事も、地域で受け継いでいる伝統も、今実際にやっている人が一生懸命やつていれば子供もそれを真似るし、そついつ意志を伝えるのは大人の責任なのかもしれない。その季節ごとの行事を大切に続けていきたいですよ。本日はありがとうございました。ごさいました。一同 ありがとごさいました。



七日町観音堂のだるま市